

学生との出会いが、 谷瀬の未来をひらく

令和8年7月

～谷瀬地域受入協議会～（十津川村）

再生の歩みは、受け入れと交流から始まった

十津川村谷瀬地区では、2011年の紀伊半島大水害を契機に、地域の再生と将来について「これからの集落をどのように維持していくか」、「外部の人とどのように関わるか」が改めて問われることとなりました。

過疎化や担い手不足への危機感が高まる中、地域では「外から人を受け入れ、関わりを育てながら集落づくりを進める」方向が選ばれ、谷瀬の暮らしや風景を活かした交流の仕組みづくりが始まりました。

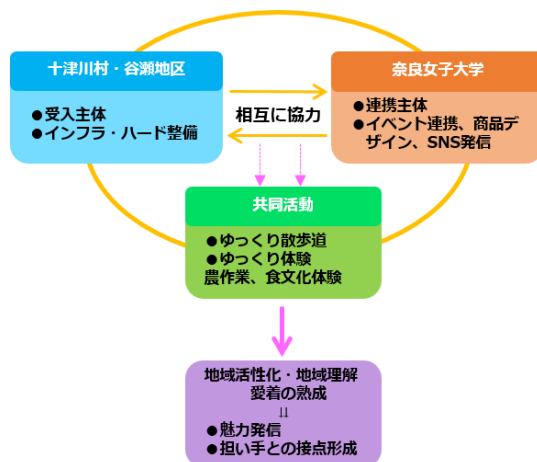


災害後の再生から始まった受入の地域づくり

谷瀬地区では、「ゆっくり散歩道」や「ゆっくり体験」などの取組を通じて、観光客や来訪者が集落の暮らしや文化に触れられる機会がつけられてきました。

さらに、2015年に谷瀬地域受入協議会が組織され、空き家を活用した交流拠点「こやすば」や「たまおか」の整備、地域の魅力発信、交流イベントの実施など、地域外の人を受け入れるための基盤づくりが進められています。

これらの取組により、谷瀬地区では、単発の来訪にとどまらず、地域と継続的に関わる人を増やしていく土台が整ってきています。



奈良女子大学の学生は2014年4月から継続的に谷瀬地区のむらづくりに関わっており、現在も継続的に活動に参加しています。

学生は、看板づくり、地域行事への参加、農作業、空き家整備、食文化体験などを通じて住民とともに活動を重ねており、こうした継続的な交流は、地域への理解や愛着を深めるきっかけとなっています。

地域にとっても、外部の視点を取り入れながら魅力を再発見し、発信につなげる機会となっており、関係人口の創出・拡大に寄与しています。

やって終わりじゃない。つながっていく地域へ

谷瀬地区では、大学との継続的な交流や受入の仕組みを土台に、地域と外の人がゆるやかにつながり続ける関係づくりが進められています。

今後は、地域資源を活かした体験や発信をさらに充実させることで、若い世代が“また来たい”“もっと関わりたい”と思える地域となり、将来の担い手づくりにもつながっていくことを目指しています。

大学と連携した開発品



＝“谷瀬”の純米酒、梅酒、
酒粕アイス、甘酒等



食べる谷瀬「ほしかいも」⇒

